

中世から近代の辞書に見る字音の消長

—呉音—

黒沢晶子（東北文教大学）

akuros9638@gmail.com

【要約】

本稿では現代語で呉音のほうが漢音より優勢な漢字について、中世の字音と比較したときの類型を見ていく。先行研究では、近代になってから、呉音が漢音に交替した字のほうが漢音が呉音に交替した字より多いことがわかっている。では、呉音のほうが漢音よりも優勢なのは、どのような字なのか。「優勢」の度合はどのくらいなのか。本稿で取り上げた10字は、字音交替の視点から3つに分けることができる。一つ目は、強い多数派が現代も勢力を維持している字（自、今、図）、二つ目に、中世は少数派も一定数使われていたが、その後多数派が勢力を拡大ないし維持した字（無、上、情；大）、三つ目は、中世は漢音のほうが優勢だったが現代語で逆転した字（日、台、客）である。「日」は、近代語の造語の際、「日本」を含んだり、「日」が日本を意味したりする語が目立つ。開国して、諸外国との対比で「日本」を意識し、日本と外国との関係を表す語が増えたのではないか。このように、字によって個別の理由が他の字にもあるかもしれない。このほか、「無」の字音が漢音「ぶ」から呉音「む」に交替した字音語について、中世から近代にかけての辞書調査を行い、概ね近代か近代に近い時期に交替が見られることがわかった。「無」に起こった字音の交替は、「主な字音を変化させる推進力」ではなく、中世以来の多数派「む」がさらなる勢力固めをする力になったと考えられる。

1. はじめに

本稿では、「打」（黒沢 2020）、「眠」（黒沢 2021）、「物」（黒沢 2022）、「言」（黒沢 2023）に続いて、漢字音が中世から近代にかけて、どのように勢力を変化させて来たかということを見ていきたい。

図1、図2を見ると、現代に生きる私たちは「むりよく」と読むだろう。だが、過去においては「ぶりよく」と読んでいた時代がある。図1は、室町時代中期の『文明本節用集』という辞書、図2は江戸時代末期の辞書だが、ともに「ブリヨク」「ぶりよく」(=ぶりよく)と振り仮名が打たれている。ここに使われている「ぶ」は漢音だが、現代の読みである「む」は呉音と呼ばれる字音である。つまり、「無力」の「む」という字音は、漢音が呉音に交替した例ということになる。

図1の『文明本節用集』では、漢字の右側に「ブリヨク」、左側に「ナシ チカラ」と書かれ、「無力」という語の読みが「ぶりよく」であり、漢字1字ごとの意味はそれぞれ「なし」「ちから」であることが示されている。また、「無力」の下に「貧（ひんなる）義」という語義が記され、この辞書では「資力のないこと」が主要な意味として記述されていることがわかる。

図2の『江戸大節用海内蔵』では、「ぶりよく」が読み、「微力」が語義となっている¹。

¹ 現代語の辞書と異なり、中世・近世の辞書では見出し語の意味を記述することは多いとは言えない。「無

ナシ

チカラ



ブ

リヨク



ぶ

りよく

図1：無力 ぶりよく
室町中期『文明本節用集』

図2：無力 ぶりよく
1861『江戸大節用海内蔵』

以下では、まず呉音・漢音の成り立ちと字音の変化を概観し、次に呉音が漢音より優勢な字の例を挙げてその類型を示す。さらに、呉音に交替した一例として、「無」（ぶ→む）を取り上げ、その時期を特定していきたい。

2. 呉音と漢音の成り立ち、字音の変化

「無」の読みである「む」は呉音、「ぶ」は漢音である。「中」や「本」「国」「高」のように呉音と漢音が同音である漢字も多いが、異なる漢字も少なくない。表1は、呉音と漢音が異なる例である。

一覧すると、2種類の字音のうち、どちらか一方がもう一方よりよく使われるといった直感の働く字が多いのではないだろうか。例えば、3番の「物」なら漢音「ぶつ」である。「物」には「食物」の「もつ」、「動物」の「ぶつ」という字音があるが、現代語では「ぶつ」のほうが多くの熟語に使われる。だが、室町時代には呉音「もつ」が主な字音だった（黒沢 2022）。また、4番の「言」は現代語では漢音「げん」が圧倒的に多くの字音語に使われているが、室町時代には呉音で「ごん」と読む語のほうが多かった（黒沢 2023）。これらは、現代語で漢音のほうがよく使われる漢字である。

表1：呉音・漢音の例

	字	呉音	漢音		字	呉音	漢音		字	呉音	漢音
1	行	ぎょう	こう	5	建	こん	けん	9	上	じょう	しょう
2	文	もん	ぶん	6	明	みょう	めい	10	自	じ	し
3	物	もつ	ぶつ	7	大	だい	たい	11	無	む	ぶ
4	言	ごん	げん	8	重	じゅう	ちゅう	12	日	にち	じつ

力」に語義が記されているのは、その珍しい例である。

このように、よく使われる字音は、しばしば時代によって変化する。では、本稿で取り上げる 10 番の「自」、11 番の「無」、12 番の「日」という字はどうだろうか。結論から言うと、後述するように、これらの字は、現代語では、いずれも呉音「じ」「む」「にち」のほうがそれぞれ漢音「し」「ぶ」「じつ」よりも優勢である。補助的に取り上げる 7 番の「大」、9 番の「上」も呉音「だい」「じょう」で読む字音語のほうがそれぞれの漢音「たい」「しょう」で読む字音語よりも多い。(ゴシックで表示)

現代日本語漢字音の主要な部分を占める呉音と漢音は、いつ、どこから伝えられたかが異なっている。呉音は、長江下流域の漢字音が 6 世紀、百濟人によって伝わったとされ、仏教（例：極楽、経、大日如来）や律令（例：宮内省、正一位）のほか、日常語（兄弟、人間、正直）などに用いられてきた。こうした漢語の呉音読みは、後に漢音が導入されてからも生き残った（沖森・肥爪 2017）。中澤（2011：19-20）によれば、呉音を存続させたのは仏教界であり、経典読誦に古い字音を使い続けることで、そのアイデンティティを確認していたという。

一方、漢音は黄河中流域の漢字音が 7~9 世紀にかけて、遣隋使や遣唐使を派遣したり、学僧・学者が渡来したりしたことに伴ってもたらされた。朝廷は、この字音を正しい音「正音」であるとして、使用を奨励した。漢音は、漢籍を学ぶ学問世界の字音としての地位を占めるようになる。例えば『老子』に出て来る「大器晩成」は「たい」「ばん」「せい」が漢音で読まれる。（「き」は呉漢の区別をしない。）（沖森・肥爪 2017）

こうして、仏教の世界では呉音、学問（すなわち漢文）の世界では漢音を用い、呉音は呉音同士、漢音は漢音同士で字音語を形成するというのが伝統的な字音の使い分けとなった。例えば、表 2 に示すように、中世・近世の辞書では「言語」は、「ごんご」（呉音+呉音）・「げんぎょ」（漢音+漢音）と読んでいる（黒沢 2023）。ところが、近代になると、「げんご」（漢音+呉音）という読みが生ずる。これは、呉音と漢音を区別する意識が薄れたことを示唆している。（なお、表中の読みは現代仮名遣い）

表 2：字音の変化「言語」（黒沢 2023）

	中世・近世	近代	現代
読み	ごんご・げんぎょ	ごんご・げんぎょ・げんご	ごんご・げんご
	呉 呉 漢 漢	呉 呉 漢 漢 漢 呉	呉 呉 漢 呉

また、ヘボンの『和英語林集成 初版』（1867）掲載の字音語の読みを基準とし、明治大正期の辞書の読みを調査した飛田（1968：373-391）によると、呉音から漢音になったものが 115 語、漢音から呉音になったものが 32 語であるという。それを字の単位で見ると、呉音から漢音への交替 65 字、漢音から呉音への交替 21 字であり、学問の世界の伝統であった漢音が規範とされ、義務教育の普及とともに一般化したとの見方が示されている。呉音から漢音への交替については、明治 20 年前後に新語形の発生が集中しているのに対して、漢音から呉音への場合も交代の時期は同じだが、著しい集中は見られない。

表 3 の「遺物」（黒沢 2022）は、中世・近世の辞書で呉音読み（ゆいもつ）だったのが近代に入って漢音読み（いぶつ）が加わり、現代語では漢音読みに落ち着いている例である²。飛田（1968）で取り

² 「遺物（ゆいもつ）」と「遺物（いぶつ）」には「死者がのこしたもの」という共通の意味があるが、「いぶつ」には「遺跡から出た大昔の品物など」という新しい意味も加わっている。後者の『日本国語大辞典』初出例は、モースの大森貝塚に関する報告書の邦訳（1879）の訳語として現れる。

上げていない中世・近世の辞書における読みからの変遷を示している。(表中の読みは現代仮名遣い)

表3 字音の変化「遺物」(黒沢 2022)

	中世・近世	近代	現代
読み	ゆいもつ	ゆいもつ・いぶつ	いぶつ
呉音・漢音	呉 呉	呉 呉 漢 漢	漢 漢

3. 研究課題および調査方法

このように、近代に入り、漢音で読むことが増えたわけだが、呉音のほうが優勢な漢字がないわけではない。それはどのような字なのか。本稿では、その疑問から出発して、まず次のような研究課題に取り組んでみたい。

3. 1 研究課題

研究課題は、次の三つである。

- (1) 現代語で呉音のほうが漢音よりも優勢なのは、どのような字か。
- (2) 「優勢」の度合はどのくらいか。
- (3) 中世と現代を比べた場合、「優勢」度の変化から見てどのような類型があるか。

3. 2 調査方法

研究課題 (1)~(3) の答えを得るための調査方法は、次の通りである。

(1) 調査対象となる漢字の抽出

常用漢字音訓表に字音の記載があり、徳弘康代 (2008) の「よく使う」順位 600 位までの字のうち、呉音と漢音の形が異なり、かつ、どちらも常用漢字音であるものを抽出する。(常用漢字音訓表が字訓のみの漢字³ はあらかじめ除外)

(2) 字音調査

室町時代の字音語と字音：室町時代の日本語を反映する『落葉集』と『日葡辞書』のいずれか、またはその両方に掲載されている字音語を検索し、字音を確認する。これにより、中世において呉音・漢音のどちらがどの程度優勢だったかがわかる。

現代語の字音語と字音：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) を NLB⁴ というオンライン検索システムを用いて字音語を検索する。

例：「*無」で「無」を含む語を検索する。抽出された字音語の読みの確認は『明鏡国語辞典 第三版』、『日本国語大辞典 第二版』による。抽出された字音語のうち、「無」を「む」と呉音で読むもの、「ぶ」と漢音で読むものそれぞれの異なり語数を比べ、現代において呉音・漢音のどちらが優勢であるかを判定する基準とした。

『日本国語大辞典 第二版』(以下、『日国』とする) で初出例や語誌を参照する。これは、特に近代になって作られた多くの漢語を特定するためでもある。

このようにして、中世および現代において呉音のほうが漢音より優勢な字を特定し、中世からどの

³ 「込」「峠」「柄」などの国字や「扱」「宛」「嵐」など字音が常用漢字音訓表外の漢字。どちらも字訓のみ常用漢字音訓表に載っている。

⁴ NLB は、動詞や名詞などの共起関係や文法的ふるまいを調べられるのが最大の特徴だが、本調査では、現代の「言」字音語を抽出する目的で使用した。国立国語研究所 (2022) NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)

ような変化があったかを見ていく。

4 調査結果

4.1 調査対象とする漢字

常用漢字音訓表に字音の記載があり、徳弘（2008）の2100字中「よく使う」順位600位までの字の内訳は表4の通りである。このうち、本稿で調査対象とするのは、Cの呉音・漢音の形が異なり、かつどちらも常用漢字音であるものである。そのような漢字は600字中の約2割ある。

表4 徳弘（2008）高頻度600字の内訳

	字数	比率 %	例
A 呉音・漢音同形	211	35.2	中 本 国 子 東 三 円 者 五 新 方 四 小 思
B 呉音・漢音の一方または両方が常用漢字音外	268	44.7	年 十 時 前 八 月 後 ; 同 合 動 院 増 研 軍
C 呉音・漢音とも常用漢字音	121	20.2	日 一 大 会 人 上 生 行 今 金 力 米 自 地
計	600		

4.2 中世・現代ともに、ほとんど呉音が使われる字

本稿では、表4のCのうち、現代語で呉音が優勢なものから10字を取り上げ、中世と現代との対照から、試みに3つの型に分けてみたい。1つ目は、中世・現代ともに、ほとんど呉音が使われる字である「自」「今」「図」である。

4.2.1 「自」

「自分」の「自」を含む字音語は、『落葉集』に52語、NLBに178語あるが、どちらもほとんどが「じ」という呉音で読む言葉である（図3）。「じ」が呉音、「し」が漢音だが、「じ」と読む語が『落葉集』では50語（96.2%）、BCCWJでは173語（97.2%）に達する。

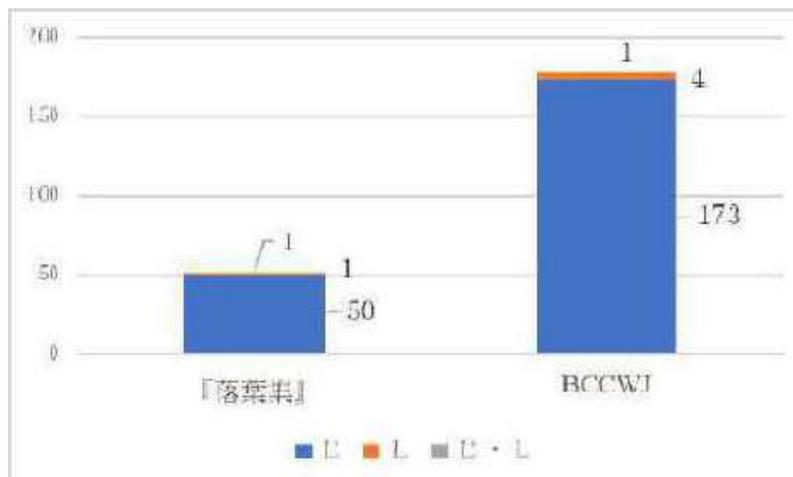


図3：室町時代と現代の「自」字音語の字音（異なり語数）

唯一、「し」という漢音で読むのが「自然」という言葉だ。同じ漢字を書いて、仏教関係では「じねん」と読む。「しぜん」は漢文を読むとき使う、というふうに使分けられていたが、近代になると、「しぜん」が nature の訳語ともなり（『日国』語誌）、より広く使われるようになった。

「自然（しぜん）」は、派生語として「超自然」（1890-91 頃）、「大自然」（1906）、「自然人」（1909）、「自然体」（1968）などを持つ。すべて BCCWJ を NLB で検索して抽出した字音語で、（ ）内は『日国』初出年を示す。

だが、この「しぜん」を除くと、あとは「じ」と読む言葉ばかりである。圧倒的に「じ」が優勢だということは、中世から現代まで変わっていない。中世、強い多数派だった呉音が現代も勢力を維持しているのである。過去も現在も、「じ」が無標の読みだと言えるだろう。

中世からある語には、「自分、自慢、自由、自立、自力」などがある。漢音で「し」と読む語は「自然」のみと言っても過言ではない。この「し」は「自」の読みとして有標だと言える。

また、近代、新語を作るときも「自動」「自動車」「自衛」「自助」のように「じ」が使われた結果、「じ」と読む語がますます増加していった。

4. 2. 2 「今」

この「自」と同じように、多数派の字音を持つ字音語が中世も現代も大多数を占める漢字として、「今日（こんにち）」の「こん」が挙げられる。「今」を含む漢語で中世からある語には、「今度、今日（こんにち）、今晚、今夜」などが挙げられるが、すべて呉音「こん」と読む。それに対して、漢音で「きん」と読むのは、「古今和歌集、今上天皇」など少数である。『落葉集』では呉音 100%、BCCWJ では呉音 85.7%、漢音 3.6%、呉音・漢音両用されるもの（古今、当今等）10.7%である。

4. 2. 3 「図」

次に、「地図」の「図（ず）」は、『落葉集』に字音語がわずか9語しか載っていないが、うち8語が呉音「ず」で読むものである。現在「としよ」と漢音で読む「図書」は「ずしよ」と読まれていた。この「図書」を含む字音語を『日本語歴史コーパス（CHJ）』（中納言 2.6.1、データバージョン 2022.03）で見ると、「としよ」とふりがなの打たれているのは、1887年以降の新聞、小説、雑誌記事、教科書等54件である。「づしよ」とふりがなのあるものも1917年までであるが、8件にとどまっている。この期間は、「ずしよ」と「としよ」が重なって使われていたことになる。

現代語では「図書館」「意図」「版図」など、漢音「と」で読む語が8語（11.9%）あるが、「図」「地図」「図表」「図形」等、呉音「ず」で読むものが58語（86.6%）と大多数を占める。なお、「図体」の「ずう」は常用音訓表外の読みである。「胴体」の字音の変化した語という（『日国』）。

4. 3 中世・近代ともに呉音が優勢だが、中世は漢音が一定数ある字：「無」「上」「情」「大」

2番目に取り上げるのは、中世・近代ともに呉音が優勢ながら、中世は漢音読みの語が3割前後ある字である。「無」を中心に、「上」「情」「大」を見ていきたい。

「無」の場合、『落葉集』122語のうち、約72%が呉音で「む」と読む字音語だった。現代になると、BCCWJの248語のうち、90%余りが「む」、残りが「ぶ」となる。中世のほうが漢音「ぶ」の存在が目立つ。冒頭、図1と図2に示したように「無力」のように、「無」は、現在「む」と読む語の一部がかつては「ぶ」と漢音で読まれていた（「無力」ぶりよく→むりよく）。が、中世も多数派だった「む」がさらに勢力を拡大して現代に至っている。その中世と現代との対照を図4に示す。

字音の交替した字音語を探すと、「む」から「ぶ」に読みが替わった語はない。「ぶ」から「む」への交替は、「無力」「無気力」「無双」「無為」などに見られる。これは、「少数派が多数派に交替」するパターンがあると屋名池2005が述べている例に該当すると言えよう。また、近代以降の新造語も「む」を用いるものが92%を占める。「皆無」「無意識」「無煙炭」「無機物」「無限」「無差別」「無自覚」等

ある。ただ、漢音読みの「ぶ」がなくなったわけではない。「無器用」「無沙汰」「無事」「無礼」等は、

今でも私たちの日常会話に登場する言葉である。

この「無」のように、中世すでに多数派だった字音がさらに勢力を拡大した漢字には「上」「情」がある。「上」は呉音「じょう」が 67.6%から 98.5%、「情」は呉音「じょう」が 65.5%から 99%へと激増し、「漢字音の一元化」と屋名池（2005）が呼ぶ現象を体現している。

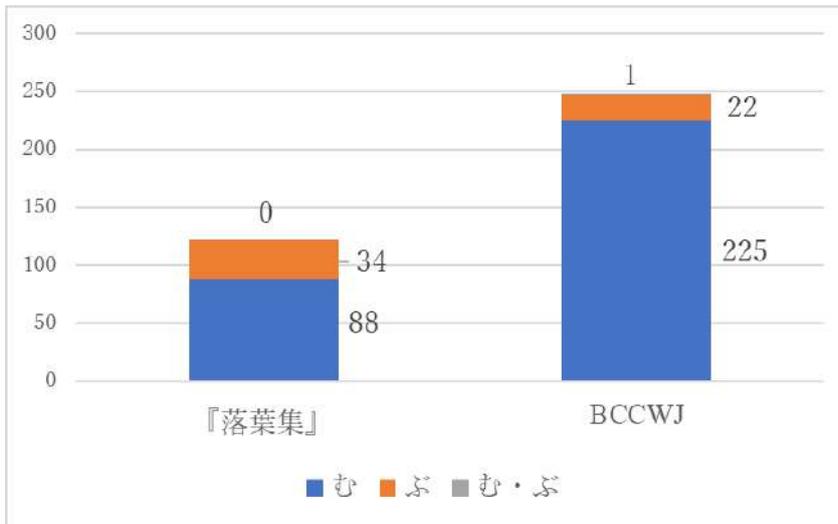


図4：室町時代と現代の「無」字音語の字音（異なり語数）

一方、「大」は、呉音「だい」が 61.4%から 54.7%へと微減しているが、現代語でも多数派の座は譲っていない。

4. 4 中世は漢音読みの字音語が呉音読みより多かったが、現代語で逆転したもの：

「日」「台」「客」

3番目の類型は、「日」のように、中世は漢音「じつ」のほうが多数派だったのに、現代語では呉音「にち」が逆転して多数派になったというものである。

本稿で主に見るのは、「日曜日」の「日」である。『落葉集』では「にち」ないし「にっ」と読むのは全体の 34%に過ぎなかったが、BCCWJを見ると、63%近くまで増えている。図5にその変化を示す。

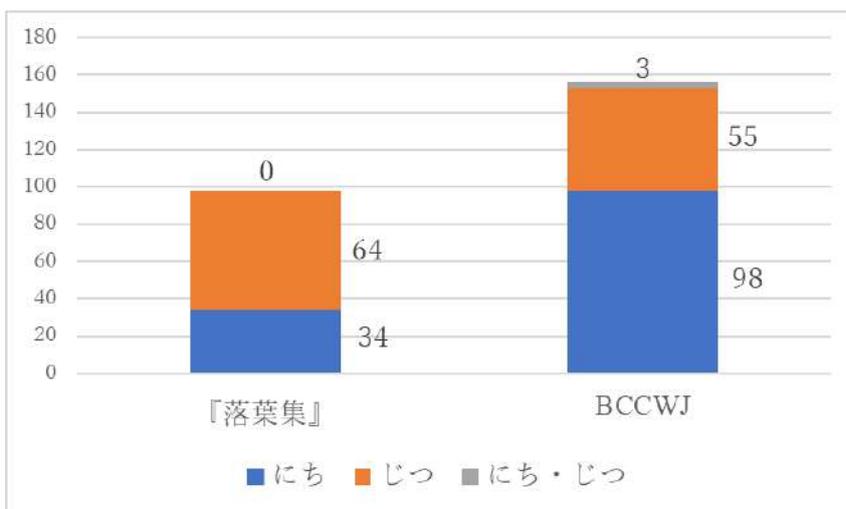


図5 室町時代と現代の「日」字音語の字音（異なり語数）

中世からあり、現代も読みが同じ語は、「にち」に 18 語、「じつ」に 26 語ある。「にち」と読むのは、「今日」「日用」「日光」「日記」「毎日」「日本」等、「じつ」と読むのは、「昨日」「先日」「元日」「翌日」「落日」等である。

一方、どちらにもあり、かつ字音の交替があった語は「にち→じつ」4 語、「じつ→にち」2 語と少ない。

「にち→じつ」の交替は、「日月」「隔日」「祝日」「当日」、「じつ→にち」の交替は「社日（土地神

をまつる日)」「半日」と限られている。「にちがつ」が「じつげつ」、「かくにち」が「かくじつ」となり、「はんじつ」が「はんにち」となったりした。

そして、中世にあったが、現代語にない語はどうだろうか。中世「にち」と読んでいて現代なくなった語は11語で、相対的に少ない。一方、中世、「じつ」と読んでいて、現代なくなった語は34語が多い。それなら、近代の新造語に「にち」と読むものが多いのだろうか。それを調べてみると、確かに「にち」が34語で、「じつ」の16語よりは多い。それを少し詳しく見てみよう。

近代以降の新造語で「にち」と読むものには、「日射」「日誌」「日本酒」「抗日」等がある。それに対して、「じつ」と読む新造語としては、「向日性」「本日」「末日」等が挙げられる。「にち・じつ」両方の読みを持つのは「吉日」1語である。

近代の新造語を見てみると、「日」が「日本」を意味するものが目につく。「日本」をそのまま使った「日本食」「日本髪」「日本間」「日本酒」「日本脳炎」「日本晴れ」、「日」が「日本」を意味する「来日」「日系」「反日」「訪日」「抗日」「親日」「排日」「日貨（日本で生産し輸出された商品）」の合わせて14語である。これは、日本が開国して、諸外国との対比で「日本」を意識したり、日本と外国との関係を表す語が増えたということではないだろうか。例えば、「日貨」には、「日貨の排斥が行はれる」（横光利一 1928-31）という初出例が『日国』にあり、『広辞苑』『明鏡国語辞典』とも「日貨排斥」「日貨排斥運動」という用例を載せている。上記の一連の字音語は、日本の近代史を思い起こさせるものである。

「日」の字音として近代の新造語に「にち」がより多く使われていることには、こうした言語外の要因も関与しているのではないと思われる。これは「日」に当てはまる要因ではあるかもしれないが、一般化はできない。ただ、字音の交替には、このように字によって個別の理由がある場合があるように思われる。

ほかに、「日」と同じように、中世の少数派が現代は多数派になった例には、「台」「客」を挙げることができる。「台」は呉音「だい」が28.6%から81.6%へ、「客」は呉音「きゃく」が6.7%から64.5%となっている。「台」は、中世「たい」と読まれていた20語中、『明鏡』で見出し語にあるのは「舞台」1語のみである。それ以外の「たい」字音語は消え、勢力を示すことができなくなった。また、「客」は、現代語でも「旅客機」を「りよかつき」と言い、「りよきゃつき」とは言わないが、中世は「旅客」「客席」「珍客」等、「客」を含む字音語のほとんどが「かく」と読まれていた。ただ、「客」単独では「きゃく」と発音する例が狂言に見られ（『日国』）、それが熟語にも広がったものか。それぞれの交替の背景は何なのか、改めて調べる必要がある。

4. 5 ここまでのまとめ

3. 1に掲げた研究課題は、次の三つであった。ここまでにわかったことを整理してみたい。

(1) 現代語で呉音のほうが漢音よりも優勢なのは、どのような字か。

本稿で取り上げた字は、次の10字である。

自 今 図 ; 無 上 情 大 ; 日 台 客

調査対象として、呉音と漢音が異なり、かつどちらも常用漢字音であるものが（徳弘（2008）2100字の高頻度600字中）121字あるが、そのごく一部について調査を行った。

(2) 「優勢」の度合はどのくらいか。

- ①ほとんど呉音（呉音が無標） ②呉音が多数派

(3) 中世と現代を比べた場合、「優勢」度の変化から見てどのような類型があるか。

①強い多数派が現代も勢力を維持

②少数派も中世には一定の力を持っていたが、現代は多数派が勢力を拡大または維持

③少数派が勢力を拡大し、逆転

③には、字によって個別の理由があるかもしれない。(例：「日」じつ→にち)

5. 呉音に交替した字音語 「無」ぶ→む

ここからは、漢音から呉音に交替した字音語の一例として、「無」の字音の交替を少し詳しく見てみたい。

本稿冒頭で図1、図2に示した中世と近世の辞書の例は、「無力」という字音語がかつては「ぶりよく」と読まれていたというものだった。「力がないこと」という、現代語と共通する意味だけでなく、「資力のないこと」「貧しいこと」(『文明本節用集』室町中期)という意味を持ち、「無力(ぶりよく)する(貧乏する)のように動詞としての用法もあった(『日国』1623)。

さて、ここでの研究課題は、次の二つである。

(1) いつごろ「無」の字音が交替・変化したのか。

室町～明治の辞書で「無」を含む字音語の読みを見る。

(2) 「言(ごん→げん)」の変化の2段階(6. 8参照)は、「無(ぶ→む)」にも当てはまるか。

表5が調査した辞書の一覧で、国語辞書、漢字辞書、対訳辞書が含まれる。合わせて9種の辞書中、近代のものが4種である。電子版と索引および影印本を見た。

表5：「無」(ぶ→む)字音語の読み調査対象の辞書

	種類	辞書名	写本 刊本 活版	西暦	和暦	使用した 電子化資料の 所蔵
1	国語	文明本節用集/雑字類書	写	—	室町中期	国会図書館
2	漢字	落葉集	刊	1598	慶長3刊	国文学研究資料館 学術情報リポジトリ
3	対訳	日葡辞書	活	1603-04	慶長8-9刊	—
4	国語	和漢音釈 書言字考 合類大節用集	刊	1717	享保2刊	早稲田大学
5	国語	江戸大節用海内蔵 カクイグラ	刊	1834 増 補、1863 補刻	天保4 増補 文久3 補刻	国文学研究資料館
6	対訳	和英語林集成 第3版	活	1886	明治19刊	明治学院大学
7	国語	和漢雅俗いろは辞典	活	1889	明治22刊	国会図書館
8	対訳	和英大辞典(ブリック)	活	1896	明治29刊	国会図書館
9	対訳	日台大辞典	活	1907	明治40刊	国会図書館

辞書画像は、辞書名欄・所蔵欄の情報、和暦等によって検索することができる。

6. 呉音に交替した「無」字音語 辞書調査結果と考察

6. 1. 「無」の字音を調査した見出し語等

表6に示すのは、「無」を含む見出し語が『落葉集』と『日葡辞書』の両方、ないしは、そのどちらかにかあって、かつ『明鏡国語辞典』第三版（以下、明鏡）にも見出し語、ないしその他の読みとして載っているという条件を満たす字音語である。これは室町時代に存在し、現代語としても辞書に掲載されているということである。中世の読みが漢音「ぶ」であり、現代の読みが呉音「む」に交替した6字を字音の変化時期を調べるための検索語とした。

表6：検索語 6語（読みの表記は現代かなづかい）

	見出し語	中世の読み	現代の読み
1	虚無	きよぶ	きよむ
2	無為	ぶい	むい
3	無気力	ぶきりよく	むきりよく
4	無双	ぶそう	むそう
5	無道	ぶどう	むどう
6	無力	ぶりよく	むりよく

6. 2 「虚無」きよぶ → きよむ

「虚無」は近世の辞書に出ていないのではっきりしないが、少なくとも近代になると「きよむ」と読むようになっている。（「虚無党」を含む。）（表中の赤字：呉音、黒字：漢音、紫字：呉音と漢音。以下同じ）

表7：「虚無」 きよぶ → 1886 きよむ

	室町中期	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
	N/A	ぶ	ぶ	N/A	N/A

1886	1889	1896	1907	2010
へボン 和英 語林集成	和漢雅俗 いろは	和英 大辞典	日台 大辞典	明鏡国語 辞典
む	む	む	む	む

6. 3 「無為」ぶい → むい

表8の「無為（むい）」は、室町中期の『文明本節用集』に「むい」「ぶい」のどちらも載っているが、その後、江戸時代を通じて「ぶい」が専ら辞書の見出しとなっていた。再び「むい」が現れるのは、へボンの1886年『和英語林集成』からだが、1889年と1907年の辞書には「ぶい」と「むい」が

どちらも掲載されている。現代では、「ぶい」がなくなり、「むい」が残っている。

表 8: 「無為」 ぶい → 1886 むい

	室町中期	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
	む・ぶ	ぶ	ぶ	ぶ	ぶ
1886	1889	1896	1907	2010	
へボン 語林集成	和漢雅俗 いろは	和英 大辞典	日台 大辞典	明鏡国語 辞典	
む	む・ぶ	む	む・ぶ	む	

「無為」とは、①作為のないこと ②仏教で、変化することのない絶対の真理 ③何もしないでぶらぶらしていることを意味する。基本的にはお経のような仏教系では呉音で「むい」と読み、『論語』のような漢籍系では漢音で「ぶい」と読んでいたことがわかっているが、『落葉集』から『江戸大節用』までの辞書を見ると、中世、近世は漢音読みの方が優勢だったと考えられる。中世、漢音読みが優勢だったことは、『日本国語大辞典』の語誌にも書かれている。

6. 4 「無気力」 ぶきりよく → (現代) むきりよく

「むきりよく」は、『落葉集』と日葡辞書には「ぶきりよく」となっているが、現代語では「むきりよく」である。残念なことに、近世、近代にかけて、調査した辞書には見出し語として出ていないため、交替の時期は特定することができない。

表 9: 「無気力」 ぶきりよく → (現代) むきりよく

	室町中期	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
	N/A	ぶ	ぶ	N/A	N/A
1886	1889	1896	1907	2010	
へボン 語林集成	和漢雅俗 いろは	和英 大辞典	日台 大辞典	明鏡国語 辞典	
N/A	N/A	N/A	N/A	む	

6. 5 「無双」 ぶそう → 1886 むそう・ぶそう

4番目は「無双」である。「無双」は、二つとないこと、並ぶものがないことを意味する。「国士無双」と言えば、その国の中で特にすぐれた人物を指すが、中世から近世にかけての辞書には「ぶそう」と出ている。それが近代になるや、「むそう」と「ぶそう」の両方が並ぶようになるが、現代の国語辞典には「むそう」だけが見出し語として出ている。

表 10 : 「無双」 ぶそう → むそう・ぶそう

	室町中期	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
	ぶ	ぶ	ぶ	ぶ	ぶ
1886	1889	1896	1907	2010	
へボン和英 語林集成	和漢雅俗 いろは	和英 大辞典	日台 大辞典	明鏡国語 辞典	
む・ぶ	む・ぶ	む・ぶ	む・ぶ	む	

6. 6 「無道」 ぶとう → 1861 むどう

5 番目の「むどう」は「考え、行動などが道理にはずれていること」という意味である。『日国』で初出例を見ると、「むどう」という読みが平安時代の文献に見られる。一方、古い辞書を見ると、中世から近世中期にかけては「ぶ」で出ていて、江戸末期の辞書に「む」が現れる。が、近代になっても、「ぶとう」もまだ生きていたことがわかる（とう：漢音）。現代は「むどう」で落ち着いている。

表 11 : 「無道」 ぶとう → 1861 むそう・ぶそう

	室町中期	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
	ぶ	ぶ	ぶ	ぶ	む
1886	1889	1896	1907	2010	
へボン和英 語林集成	和漢雅俗 いろは	和英 大辞典	日台 大辞典	明鏡国語 辞典	
ぶ	む・ぶ	ぶ	む・ぶ	む	

6. 7 「無力」 ぶりよく → 1886 むりよく

「無力」を「むりき」「むりよく」と読んで「何かをしとげるのに能力や資力が及ばないこと」を表す例は13世紀にもあるのだが、中世、近世の辞書には「ぶりよく」が載っている。そして、近代以降は、「むりよく」に交替する。

表 12 : 「無力」 ぶりよく → 1886 むりよく

	室町中期	1598	1603	1717	1834
辞書	文明本 節用集	落葉集	日葡辞書	書言字考 合類大節用	江戸大節用
	ぶ	ぶ	ぶ	ぶ	ぶ

1886	1889	1896	1907	2010
へボン和英 語林集成	和漢雅俗 いろは	和英 大辞典	日台 大辞典	明鏡国語 辞典
む	む	む	N/A	む

6. 8 研究課題への答え

(1) いつごろ「無」の字音が交替したのか。

近代に交替 4語： 「虚無」「無為」「無双」「無力」

近世末に交替 1語： 「無道」

近世～近代の間 1語： 「無気力」

「む」の字音が替わった字音語6語について、辞書上の変化の時期をまとめると、このようになる。近代に交替したものが4語、近代末に交替が見られるものが1語、そして近世から近代にかけての間ということしかわからないものが1語である。たった6語だが、全体として、近代、あるいは近代に近い時期に交替が見られると言えそうである。

(2) 「言（ごん→げん）」の変化の2段階は、「無（ぶ→む）」にも当てはまるか。

黒沢（2022、2023）では、「物」「言」の字音の変化には次のような二つの段階があるとした。

① 古くから伝わる語が一部新しい字音で読まれ始める。

物 もつ→ぶつ 1717 器物 1886 遺物・唐物 1888 財物

言 ごん→げん 1597 発言 1886 言語 1888 虚言

② 新しく作られた語が新しい字音で読まれる。

物 ぶつ 1869 博物学 1874 鉱物 1877 農産物

言 げん 1886 証言 1887~89 言動 1900 提言

字音の変化には、初めに、古くから伝わる言葉が一部新しい字音で読まれ始める段階がある。「言語」の「げん」では、「発言」「言語」などがそれに当たる。次に、新しく作られた言葉が新しい字音で読まれる段階があり、これがその**新しい字音を定着させていく力になる**と考えられる。「言」の調査では、明治以降に造られた「証言」「言動」「提言」などがこの二つ目の段階を示す例である。

では、「無」は、どうだろうか。「無」にも1（無力、無双等）、2（皆無、無意識等）の段階がないわけではない。だが、「無」は中世でも呉音が多数派だったし、現代ではさらに勢力を拡大した。このことから、「無力」等6語の字音の交替は、「物」や「言」のように「**主な字音を変化させる推進力**」にはなっていないと言える。ただ、**少数派「ぶ」が多数派「む」に交替した例**であり、それが**多数派をさらに強いものにする力になった**と考えられる。

本稿の調査では、そもそも主な字音が変わらない字があった。①強い多数派が現代も勢力を維持している「自」、②少数派も中世は一定数使われていたが、その後多数派がさらに勢力を拡大した「無」などがその類型である。一方、主な字音が時代によって変化した字もあった。③少数派が勢力を拡大し、多数派になった「日」がその例である。「日」の場合は、日本という意味を持つ言葉が近代に多く造られたこと、その読みが「にち」だったことも呉音「にち」が急増する推進力になったと思われる。ただし、これは「日」独自の理由であり、一般化は難しい。

7. 今後の課題

調査対象として抽出した 120 字あまりの字の中で、本稿で取り上げたが調査が不十分なもの、調査できなかったものがまだ多く残っている。まず、その中から、呉音のほうが漢音より優勢な字を特定し、字音交替の調査を続けることによって、本稿で行った 3 分類が妥当かどうか、検討すること、それに加えて、これまで同様、呉音・漢音・慣用音を含めて、個別に字音が変わっていった時期を特定すること、変化にどのような段階があるかを検証すること、さらに、なぜ／どのように変化したかを考えることで、字音交替の綱引きに勝つ要因は何か考えることを今後の課題としたい。

参考文献

- 小川誉子美 (2020) 『蚕と戦争と日本語－欧米の日本理解はこうして始まった』ひつじ書房
- 沖森卓也・肥爪周二編著 (2017) 『日本語ライブラリー 漢語』朝倉書店
- 黒沢晶子 (2011) 「中国語母語話者と入声音－『循環型社会をジゲンし』とは？－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.23, 137-145.
- 黒沢晶子 (2013) 「漢字音教材開発－入声音を含む漢語の音変化をどう扱うか－」『日本語教育方法研究会誌 20-1.
- 黒沢晶子 (2015) 「漢字音教材開発－音符の活用－」『日本語教育方法研究会誌』22-1.
- 黒沢晶子 (2016) 「漢字音の長音教材－中国語母語話者と非母語話者を対象に」『日本語教育連絡会議論文集』vol.29, 147-157.
- 黒沢晶子 (2017) 「漢字音の清濁を何から見分けるか」『日本語教育連絡会議論文集』vol.30, 103-117.
- 黒沢晶子 (2018) 「音符は漢字音学習にどのぐらい活かせるか－カ・タ・ナ・ハ・マ行－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.31, 22-34.
- 黒沢晶子 (2019) 「常用漢字の字音を音符で見分ける－長さの違いはどこから来たか－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.32, 68-82.
- 黒沢晶子 (2020) 「中世から近代への字音の消長－「打」－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.33, 48-65.
- 黒沢晶子 (2021) 「中世から近代への字音の消長－「眠」－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.34, 51-62.
- 黒沢晶子 (2022) 「中世から近代への字音の消長－「物」－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.35, 121-136.
- 黒沢晶子 (2023) 「中世から近代への字音の消長－「言」－」『日本語教育連絡会議論文集』vol.36, 74-89.
- 国語学会編 (1976) 『国語史資料集－図録と解説－』武蔵野書院
- 小島幸枝 (1978) 『耶蘇会板「落葉集」総索引』笠間書院 国文学研究資料館学術情報リポジトリ
- 今野真二 (2012) 『日本語学講座第 5 巻『節用集』研究入門』清文堂
- 藤堂明保 (1957/1980a) 『中国語音韻論－その歴史的研究』光生館
- 藤堂明保 (1980b) 「中国の文字とことば」藤堂明保編『学研漢和大字典』学習研究社
- 中澤信幸 (2011) 「呉音について」『日本語学』30-3 : 18-27.
- 中田祝夫 (1979) 『改訂新版 古本節用集六種研究並びに総合索引』勉誠社
- 中田祝夫 (2006) 『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引 影印篇・索引篇』勉誠出版
- 中田祝夫・小林祥次郎 (2006) 『改訂新版 書言字考節用集研究並びに索引』勉誠出版
- 沼本克明 (1986) 『日本漢字音の歴史』東京堂出版
- 沼本克明 (2014) 『帰納と演繹とのほさまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず－字音仮名遣い入門－』汲古書院
- 飛田良文 (1968) 「明治大正期における漢音呉音の交替」『近代語研究』2

- 森田武（1993）『日葡辞書提要』清文堂出版
- 屋名池誠（2005）「現代日本語の字音読み取りの機構を論じ、「漢字音の一元化」に及ぶ」築島裕博士
傘寿記念会編『（築島裕博士傘寿記念）国語学論集』汲古書院
- 山田俊雄（1978）『日本語と辞書』中央公論社
- 湯沢質幸（1987）「漢字の慣用音」佐藤喜代治編『漢字講座 第3巻（漢字と日本語）』明治書院
- 吉田金彦（1971）「辞書の歴史」阪倉篤義編『講座国語史第3巻 語彙史』大修館書店

参考資料

- 北原保雄編（2021）『明鏡国語辞典 第三版』大修館書店
- 国立国語研究所（2021）『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版』(BCCWJ) ver. 2021.03
<<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>>
- 国立国語研究所（2022）NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) <https://nlb.ninjal.ac.jp/>
- 国立国語研究所（2024）『日本語歴史コーパス』（CHJ）ver.2024.3, 中納言 ver.2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>
- 国立国会図書館デジタルコレクション <<https://dl.ndl.go.jp/>>
- 国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース <<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>>
- 小学館国語辞典編集部編（2005-2006）『精選版日本国語大辞典』小学館
- 土井忠生・森田武・長南実編訳（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店
- 徳弘康代（2008）『日本語学習のためのよく使う順漢字 2100』三省堂
- 藤堂明保編（1980b）『学研漢和大事典』学研
- 藤堂明保編（2006）『漢字源』学研
- 『明治文学全集』（1965-1989）筑摩書房 Japan Knowledge 版
- 森田武編（1995）『邦訳日葡辞書・邦訳日葡辞書索引』岩波書店
- Japan Knowledge オンライン辞書・事典検索サイト <https://japanknowledge.com>
- NHK 放送文化研究所編（2016）『NHK 発音アクセント新辞典』NHK 出版.